

31日・父死去後の心境を綴った随筆「一碗の茶」を執筆。（「曲水」10―1）掲載、絶筆となる。

11月1日付鈴木三千代宛書信。

12月8日付鈴木三千代宛書簡。

28日付鈴木三千代宛書簡。

▽大正14年（1925）

1月・「曲水」(10―1)。南拾参生「感覚を超えて」が、長頸子の「湯灌の燈そのま、にある蛙かな」をとりあげ、川田順、日夏耿之助らの芸術論を引用、「俳句芸術の威力に拝跪する」と述べる。

20日付、鈴木三千代宛書信。

2月・病床で「曲水」募集文の選ならびに選評を草する。

「曲水」(10―3)編集後記に、「昨年来、長頸子君が病床にあつて熱心に選閲された募集文章は遺憾ながら悉皆落選になりました。その文章には一篇／＼選評を附されて戻って来てゐます。お返ししますから、どうか長頸子君の選評を熟読の上更に御投稿を」とある。

この頃亮之助は、止宿先を目黒ホテル内に変え、宝文館に勤務。したがって厚一は、家事と看護の老婢を相手の二人暮らし。主治医として、下目黒で古くから開業していた田中内科医に親しんだ。

3月、妹初代、静岡県立高女選科を卒業。同千々代、同校四年修了、津田英学塾予科入学。末弟春樹、静岡男子師範附属小学校卒業、東京高千穂中学入学。

母遊佐、静岡鷹匠町の家を整理、一家を挙げて上京、厚一の

家から500メートルほど離れた下目黒326番地の借家に居を定めた。

4月21日、母方の祖父天野廉上京、病床に厚一を見舞う。

24日付の三千代宛亮之助の書信は、病状重くその日の近いことを知らせている。この手紙の封筒の裏に、画家諏訪かげよし自殺のことが記されている。諏訪は「海国少年」誌以来、厚一の作品の多くを手がけ、「子供の歌」シリーズの表紙画や、故人の肖像（巻頭写真）を画いた。

5月20日・午前10時、病勢改まり、東京府下目黒369番地の仮寓で死去。父の死におくれること7か月。妻子なく、28歳10か月であった。

師水巴は、遺骨を持って帰郷の遺族を品川駅頭に見送り、「やがて皆も行く道に待つ君涼し」の悼句を手向けた。

24日・午前10時、静岡市曲金法蔵寺で、同寺住職故遠山明鑑導師となり告別式。曲水吟社より静岡市在住の加藤余石、築地涛衣他参列。海野家累代の墓所に埋葬。

法名「文鶯院長頸志厚居士」

\*